むぎの郷 通信

“麦の郷とは”住民のニーズから
生み出され、住民の手によって育てられる

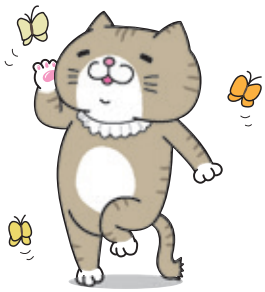
May 2025

こじか園／第二こじか園／はぐるま共同作業所／はぐるま共同作業所　和の社／はぐるま共同作業所　ラ・テール／麦の郷印刷／ソーシャルファームピネル／むぎピース／ソーシャルファームもぎたて／meglück（メグリュック）／六星舎／叶夢向／麦の郷　和歌山生活支援センター／麦の郷　紀の川生活支援センター／障害者就業・生活支援センター つれもて／くろしお作業所／麦の郷訪問看護ステーション／麦の郷居住福祉事業所／ハートフルハウス　創／事務所／ゆめ・やりたいこと実現センター／ちいき暮らしサポートセンターわかやま／Rework支援センターANEW／麦の郷障害者地域リハビリテーション研究所

揮毫：伊藤静美　発　行／麦の郷情報管理委員会　〒640-8301 和歌山市岩橋643　TEL(073)474-2466　FAX(073)474-4637　http://www.muginosato.jp

こじか園
こいのぼり製作

叶夢向
５月１日(木)事業所移転



第 29 回西和佐地区社会福祉協議会・麦の郷春祭り
４月 12 日(土)

私たちのめざすもの ～麦の郷４つの理念～

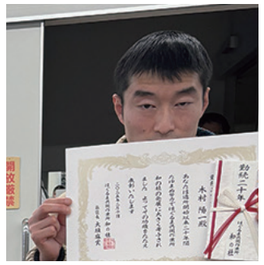
1).麦の郷は、日々学び、育み、発信し続ける人材を育成し、地域福祉の発展を目指します。
2).私たちは、ものづくりを通じて障害のある人と地域の共存を実現し、互いに豊かになる実践を目指します。
3).私たちは、社会的不利の状態におかれている人々の課題を解決するために、広範な人々とつながりを深め、ともに社会変革をめざします。
4).麦の郷は、全ての人が平和で安心して暮らせる社会づくりのために人の輪を紡いでいきます。

★和の杜開所 20 年！ベテランの先輩に聞く！★

はぐるま共同作業所和の杜は、2004 年 4 月にはぐるま共同作業所の分場として開所し、2024 年度で開所から 20 年を迎えました。ここまで事業を続けてこられたのは、和の杜を創りあげてきた歴代の先輩職員やなかまの皆様方、支えていただいた法人の皆様方、またお仕事をいただける取引先の皆様方のおかげです。この場を借りて深く感謝申し上げます。

その中でも、和の杜開所当初より働き続けているなかまが３名いらっしゃいます。彼ら、彼女らも勤続 20 年を迎えることになりました。2 月 10 日に勤続 20 年を祝う会と成人したなかまを祝う会が開かれ、後輩たちが見守る中で記念品の贈呈と、場所を変えて食事会を開きました。まだ 20 歳になったばかりのなかまが産まれた年から働き続けているなかまがいると思うと、尊敬の念を覚えました。

池田光彰さん



木村陽一さん

さて、今回勤続 20 年を迎えたなかま 3 名のうち 2 名、池田光彰さんと木村陽一さんにインタビューをさせていただきました。20 年を迎えた彼らが何を思うのか、ご覧ください！

Q 勤続 20 年、おめでとうございます！ 20 年を迎えた今を率直にどう感じていますか？

A 木村：20 年前とあまり変わりません。

池田：もう 20 年経ったのかという感じ。いつの間にかという感じです。

Q これから仕事で頑張っていきたいことや、抱負はありますか？

A 木村：ポップコーンの種類で抹茶味やメロン味を作ってみたいです。

池田：今の仕事をこれからも頑張っていきたいです。

Q 最後に、仕事以外で何かやってみたいことはありますか？

A 木村：作業所の旅行で海遊館に行きたいです。もしよければまた USJ にも行きたいです。

池田：もしできるなら、ずっと考えていたんですけど、遠くへ一人で旅行に行きたいです。（どこに行きたいとかある？）鎌倉とか、サザン（オールスターズ）が好きなので、茅ケ崎とか江の島に行ってみたいです。

お二方ありがとうございました！

和の杜は 4 月から 21 年目に入りました。これから先、30 年、40 年とずっとなかまたちとこだわりの食品づくりを続けていけるように、これからも走り続けていきます。今後ともどうぞよろしくお願い致します。

（はぐるま共同作業所和の杜　大末　翔平）

麦の郷・法人職員研修

去る 1 月 18 日（土）プラザホープにて、麦の郷・法人職員研修会が実施されました。

これは、毎年、教育研修委員会主催で実施される全職員対象の研修です。当日、業務や用事などで出席できない人もありましたが、117 名の職員が参加しました。

今年度は、山本耕平理事長に講師をお願いし、「人権としての発達」というテーマで講義を行いました。発達保障は、麦の郷が発足当初から大切にしてきた理念の柱の一つでありますが、発達保障って難しいというイメージがあったかもしれません。発達保障は、毎日の実践を振り返る上で、人権を大切にする実践という視点からみても、とても大切な考え方であり取り組みです。

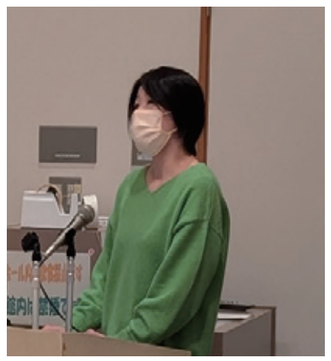
今回は、発達とは？という観点から、「タテの発達とヨコの発達」について「発達の源泉と原動力」について、わかりやすく話してくださいました。特に、人間はずっとヨコの発達をしているのだという事、他者との関わりのなかで、その人らしく、「人を思いやる」など人格を豊かに広げていくことが大切なのだという内容が、参加者の心に深く染み入ったことは、講義後の感想文からもうかがうことができました。

また、毎日の実践の中でパターナリズム（自分は支援者だから間違っていないと、本人にかわり支援者が判断すること）になっていないか、きちんと自己決定を保障できているのかというお話も、実践を振り返る良いきっかけになったと思います。

今回の研修を通じて学んだことは、あくまで学習のきっかけであり、さらに自分で学習していくことが、本当に身につく学習であると思います。今後の実践に反映できるよう、互いに学び合いましょう！

（麦の郷教育研修委員会　山本　哲士）

きょうだい会シンポジウム参加



2月1日(土)にきょうだい家族学習会主催の講演会及びシブリングサポーター研修ワークショップに参加させていただきました。病気や障がいのある子どもの「きょうだい」の支援をひろげてつながるための研修でした。第 1 部では「思春期に向かうきょうだいの理解を深める」をテーマに、私自身が「きょうだい」として育ってきた経験の中での気持ちやその当時の思いについてのお話をする機会をいただきました。

第 2 部ではＮＰＯしぶたねさんによるシブリングサポーター研修が行われ、シブリングサポーター（病気や障がいのある子どもの「きょうだい」の応援団）に認定していただきました。「きょうだい」当事者や家族の経験・思いを聞き、支援者から見た「きょうだい」との関わりについて共有し、お互いに理解を深め今後の活動に生かす事を目的とされていて、「きょうだい」支援の必要性を改めて実感する機会となりました。

今回の講演会で過去を振り返った際、同じ「きょうだい」といっても家族構成・兄弟姉妹の障害や程度・きょうだい自身の性格や特性によって様々なので同じ経験や考えの人はいないと思うのですが、私には「恋愛・結婚」の頃に多く不安を感じた経験があり、また、「親亡き後」に対しての不安を抱えている現状があります。どの「きょうだい」も誰かのためではなく、自分自身の人生を納得して歩めるような支援の輪が広がっていくことを切に願います。

（紀の川生活支援センター　吉井　美紀）

創カフェでランチレク

3月 22 日（土）春の陽気に誘われ、待ちに待ったレク。同一法人の別の事業所の様子を知りたいという職員の想いと六星舎のみんなのランチレクの要望を合わせた欲張りな取り組みです。

歴史を感じさせる素敵な古民家、『創カフェ』、ひな祭りをイメージしたプレートランチに法人内別事業所で作ったスイーツを堪能、舌もお腹も満足。その後ふうの丘（ソーシャルファームもぎたて）にも寄り山羊と触れ合い、ショッピングを楽しみお腹も心もしっかり満たされてきました。

参加した職員も仲間も普段見せない様な笑顔で大満足な 1 日となりました。　（六星舎　寺前　直哉）

山﨑邸 雛まつり

2月 27 日（木）～3月 22 日（土）2015 年から地元住民が中心となり企画運営していた「粉河とんまかひな通り」が 10 年の節目を迎え惜ばれつつ終了しました。しかし、「粉河を元気にしたいとの想いの灯が消えないように」と地元の有志の方々から声があがり今年度からは、山﨑邸内でお雛さまを展示することになりました。大きなカメラをもった人、着物姿、老若男女、様々な方々が山﨑邸を訪れ江戸から平成までの様々なお雛さまの姿を楽しみました。

（meglück 出張所創～ HAJIME ～カフェ　野中　康寛）

麦の郷防災の日「自然災害におけるBCP」訓練の取り組み

麦の郷安全対策委員会では毎年 3 月 11 日を「麦の郷防災の日」と定めており、法人内における全体訓練や研修などをおこなっています。前回は東消防署に来ていただき、簡易担架作りや三角巾による止血方法や骨折の際の処置など研修をおこないました。

今回は3月 11 日の前後 1 週間以内に各事業所で定めた自然災害によるＢＣＰ（事業継続計画：自然災害、感染症などの緊急事態に遭遇した際に事業を継続・早期復旧するための計画　24 年度に障害福祉事業所において整備が義務化）をもとに避難及び通報をおこなう訓練を実施するよう企画提案しました。

各グループホームにおいて3月 12 日 16 時に南海トラフ大地震が発生したと仮定して命を守る行動、それからの安全確保と避難、火災や土砂災害などの二次被害対応、そして関係機関、保護者への通報訓練を実施しました。訓練をおこなっている際にも果たして電話連絡が通じるのか？救急通報しても助けが来るのか？想定外のことが頭をめぐる瞬間も多く、実際に大地震が来れば対応が困難なことが多々あることが実感できました。

1月には南海トラフ地震の発生確率も高まり、現実性が高まってきていることから、来るべき事態に備えていくため、委員会では今後も訓練や研修を企画して、災害に強い事業所づくりを目指していきます。

（麦の郷安全対策委員会　武田　賢二）

卒園式

3月 26 日（水）、こじか園では卒園式を行いました。天気にも恵まれ、暑いくらいの陽気の中、在園児と保護者、来賓の方々、職員みんなで卒園児 10 名を送り出すことができました。

卒園証書授与式では、お父さんやお母さんと一緒に前に出て、卒園児として誇らしい表情で卒園証書を受け取っていました。在園の子ども達も、1 年間頑張った証としての色紙をもらい、嬉しそうにじっと見つめていました。こじか園生活で根付いた心のねっこを土台にして、4 月からの新生活もこじかっこらしく、生き生きと楽しんで欲しいと思います。

（こじか園　藤丸　祥子）

おともだち式

3 月に卒園式をして寂しい気持ちになっていましたが、4 月 4 日のおともだち式に、10 名のかわいいこどもたちが第二こじか園のお友だちになりました。「これ、なんだ～？」と興味津々であっちこっち探索したり、初めての雰囲気に落ち着かない様子でそわそわしていたりと、賑やかな式になりました。入園した子どもたちに年長児からのお花のプレゼント。初めての出番で恥ずかしそうにしながらも、自分の出番に期待してお花を渡す新年長児の姿に成長を感じる日でもありました。

（第二こじか園　野口　美加）

和歌山大学・音遊び工房とのイベント

2025 年 3 月 9 日（日）和歌山大学との共催「音遊びを楽しもう」講座を開催しました。

講師は、神戸で活動をする音遊び工房のみなさん。心のままに楽器で音を奏で、体を動かすワークショップを体験！ゆめやりメンバーはなんと、そのオープニングを飾り、ダンス、ウクレレ、歌などを披露。「初めて会ったのに、音楽のおかげでみんなと打ち解けた」「休日に友達と遊ぶことがないので、とても楽しかった」と、参加した全 27 名が、自分自身を表現する心豊かな時間を過ごしました。

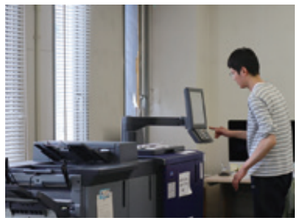
（ゆめ・やりたいこと実現センター　尾方　千春）

＊むぎ・わくわくレポート 25＊

今日もお仕事頑張ってます！

「刷り上がったんで加工に届けてよ」堀田さんの声に配送担当者が「了解」と、返事を返す。麦の郷印刷には和歌山市に 2 つの拠点があり府中では、A 型事業所で事務・編集・刷りの作業を行い、六十谷では製本などの加工作業とＢ型事業所を行っています。

堀田さんが印刷に携わるようになり早 6 年。カラー印刷ができるオンデマンド機を操る頼もしい存在です。印刷位置や色の調整、タッチパネルの操作もお手の物、片付けは勿論、翌日の準備（校了していないものについては担当者への確認も抜かりはありません）を終えてから帰路へ。納期通りに商品をお届けできる感謝の日々です。



（麦の郷印刷　岡﨑　宏江）

追悼　尾﨑由加子氏をしのぶ

こじか園の現職管理者である尾﨑由加子氏が、２月26日午前5時を直前にして死去された。衷心よりご冥福をお祈りします。

1979年、私が日本福祉大学大学院修士課程を修了し、和歌山信愛短期大学に非常勤講師の職を得た時、最初の授業が保育科の「社会福祉」だった。かなり力を込めて緊張しながら社会福祉の概史や理論・政策を準備したノートと共に三木町にあった信愛短大３階の保育科の教室に入室したことを覚えている。

教壇に立つと、教壇と学生の距離が、私が体験してきた大学での距離とは違いすぐそこに学生たちが座っていた。その時、教壇からたしか４番目に座っていたのが尾﨑由加子さんだった。私が自己紹介で六十谷駅の近くに住んでいることを話すと、六十谷近くに住む学生が、私たちが住む二戸一の文化住宅になだれ込んできた。その一人に尾﨑さんがいた。その自己紹介で私の年齢を紹介すると、なにか年齢を証明できる物を持ってくるように要求されたことを思い返す。彼女に誘われ私の妻が働く阪南の保育所に勤務するようになり、彼女の同僚となったのは、それから数年後である。

私が彼女の力量を確認したのは、保育所を退職した彼女が、私が保健所で行なっていたグループセラピーのスタッフとして参加し始めてからである。その後、こじか園の親子教室のスタッフを通してこじか園のスタッフさらには園長となっていった。

彼女が、人生のなかで最も重く受け止めたのは、2012年５月30日に生じた園児の事故死であろう。それは、保育時間中に生じた事故だった。その事故を通し、彼女は、より完璧に仕事を行ないたいとの思いを強めていったのではなかろうか。社会福祉実践の過程では、どれだけ慎重に実践をすすめていても意図しない事故が生じることがある。こうした事故が生じた時、管理者のトラウマが継続し、管理者の人生に重い枷を与えてしまうことがある。

現職管理者の病死と出会った時、法人理事会は、タテの管理の不十分さを痛感した。尾﨑氏から最初に「間質性肺炎の治療をしていたが、今回、咳が止まらずに検査をすると癌細胞がみつかった」との連絡を受けたのは，2024年11月7日の経営会議の日だった。その日に入院し、抗がん剤によるがん剤治療が始まったが、それから3か月半後の2025年2月26日に死去した。あまりにも短かかった。

管理者が、それぞれの事業所を懸命に運営しなければならないとの責任感から、理事会（経営会議）に「Help me」を出す関係性が、理事会（経営会議）とその管理者との間にできているのかを、今、尾﨑氏のあまりにも早い死を通して顧みなければならない。

尾﨑氏の長女から最初に電話があったのは2月25日の夕食が終わった時だった。「母が、「先生にどうしても会いたい。どうしても話しておきたいことがある」と言っている」と言っているのです。とのことであった。夜であり、明日までは大丈夫だろうと思い、「明日、一番にいきます」と答えたが、心配になった私は、スマホの音量を最大限にし、枕元に置いた。そのスマホが、午前４時になった。「早くきて欲しいです」との声にとにかく急いだ。

２月22日のショートメールで、私は、彼女に、朝日新聞の「ひととき」の記事を送った。それは、「ゴッホを巡る旅」というものだった。61歳の主婦からの投稿で40代半ばに癌を患い、３回の手術と抗がん剤治療を行なってきて、大好きなゴッホを巡る旅に一昨年の秋にでかけたというものであった。

このメールに、彼女から、「私も生きる、生きます」との返信があった。よし、まだ生きる意欲があると思ったが、それから、わずか４日だった。彼女の用件は、それまでのショートメールに書き尽くされていた。彼女が、昨年の年末以降、さまざまな不安のなかで生きてきたことは、時々のショートメールに残されている。そこに常にあったのがこじか園の今後のことである。

こじか園で彼女たちと共に過ごしてきた子ども達が、教育の現場から労働の現場に移行し、法人の事業所で働く姿を多くみる。そのなかの一人（Aちゃん）が、くろしお作業所で働く。ある時、「では散歩に行きましょう」という支援者の声がかかると、言葉をもたない Aちゃんであるが、率先して散歩用のリュックに、メンバーのコップを入れてその用意をし始めた。散歩から帰ってくると、Aちゃんは、流し台にそのコップをザザーと入れ、指導員がコップを洗う用意を行なった。これが、こじかで育った Aちゃんの生きる力ではなかろうか。

こじか園は、子ども達がその後の人生を生きる力を育てている。法人は、そのこじか園の実践に責任を持つとともに、その後の人生にも責任をもっている。これが、その人生に一貫して関わる社会福祉法人一麦会（麦の郷）の姿である。尾﨑氏は、その障害児者の一貫した人生を保障するなかで生きてきた。

病院でまだ酸素が送られ胸が動いているあなたに、私は、「こじかのことは心配しないでください」と声をかけた。安心して眠ってください。（理事長　山本　耕平）

感謝の気持ちを胸に

尾﨑園長が旅立たれて１ヶ月と少し。長かったようなあっという間だったような不思議な感覚です。昨年12月からの尾﨑園長の休職以降、職員が一丸となって、ただひたすらに、それぞれの役割を果たすことをがむしゃらにやってきたように思います。保護者の皆さんや子ども達も、尾﨑園長が不在で不安がある中、ともに歩んでくださっていますし、保護者の方からは職員に対してお気遣いをいただくこともありました。この場をお借りして感謝申し上げます。

私が尾﨑先生（ここでは当時の呼び名で書かせていただきます）と初めて出会ったのは、尾﨑先生がこじか親子教室の職員、私が大学院生の時です。私は週に１日、奈良から片道２時間半ほどをかけてこじか園に通い、実践現場で学ぶ機会をいただいていました。何かの用事でこじか園に来られていたのでしょう。当時の園長・髙山先生から「紹介するね。尾﨑さん」と、園長室のソファに座っておられた尾﨑先生を紹介してもらいました。その時は一言挨拶するだけだったと記憶しています。

大学院修了後、こじか園で働き始めました。通常の勤務と併行して、和歌山県障害児保育運動連絡会の会議やこじか園の認可10周年にむけての企画会議、つながり文化祭の実行委員会、全国発達支援通園事業連絡協議会の全国大会の事務局会議など、通常業務以外の会議に在職１～２年目の時から行くように言われ、そこで尾﨑先生とお会いすることが年々増えていきました。

いつからでしょう。私は会議で会った後、日頃ふつふつと疑問に思っていることを尾﨑先生に聞いてもらうようになっていました。「こじか園でこういうことがあった。親子教室ではどうしているか？」「出張で行っている他の自治体ではこうだが、和歌山市ではどうか？」ということや、ささいな愚痴・悩みなど、本当に色々と聞いてもらいました。聞いてもらうことで自己客観視することにつながり、「じゃあ、自分はこうしていこう」と前に進むきっかけをもらっていました。会ったら聞いてもらえる安心感がありました。

また、こじか親子教室の保護者学習会で発達に関するお話を担当するようになり、こじか親子教室の保育を見学したり参加したりするようにもなりました。そこで尾﨑先生が大事にされている保育・療育観を目の当たりにするようになりました。

近年は「こじか園の園長」と「直属の職員」という関係に。ここでも「保育ってこれが大事なんだな」「保護者支援って、タイムリーにこういう行動をすることが大事なんだな」など、学んだことはたくさんですし、まだまだ学べるものだと思っていました。

今、尾﨑先生が「子どもの保育現場のことを理解してもらうことが難しい」と時々おっしゃっていたことの意味をよく考えます。私たちの知らないところでこじか園を守ってきてくださっていたのだということを、ひしひしと感じます。

尾﨑先生やその前の諸先輩方、たくさんの卒園児・転園児が作り発展させ守ってきた今のこじか園。これからどうなっていくのか、どうしていくのか。現場の職員とともに考え、進んでいきたいと思っています。

もう少し落ち着いたら、卒園児・転園児たちにも声をかけ、みんなで笑顔で集える何かをしたいなぁ～、できたらいいなぁ～と勝手に思っています。

これからもこじか園のことを見守ってくださいね。これまで本当にありがとうございました。

（こじか園　藪　博美）

開所11周年を迎えて ー 支え合いの力をかたちに ー

ソーシャルファームもぎたては、開所から11年を迎えました。当施設は、障害のあるヒトと雇用契約を結び、働く場を保障する「就労継続支援 A型事業所」として運営しています。

私たちが A型事業所というかたちを選んだ理由は、労働法が適用される仕組みを持ち、福祉と労働の支援が一体となっている点に大きな魅力を感じたからです。障害のあるヒトが“働く意思”を持って福祉施設に通い、実際に仕事をしているにもかかわらず、制度上は労働者として認められないという矛盾があります。A型事業所は、この矛盾を解消する仕組みとして、「働くこと」を支える場となっています。

当事業所で働く利用者の約6割は、過去に一般企業での就労経験があります。しかし、障害特性を理解してもらえず、一般の職場では安心して働くことができない場合もありました。だからこそ、「安心して働ける場」を提供することが、私たちの使命であると考えています。

しかし近年、国の施策や制度の変更により、A型事業所を取り巻く環境は非常に厳しさを増しています。全国的にも多くの事業所が経営課題に直面しており、当事業所も例外ではありません。運営を続けていくためには、多くの困難と真摯に向き合っていく必要があります。

そうした状況の中、職員会議などで活発な議論を重ねた末、新商品の応援購入サイト「Makuake」への挑戦（2025年2月12日～3月30日）を決意しました。職員・メンバー全員で役割を分担し、プロジェクトページを作成。チラシの配布や SNSでのシェアなど、それぞれが「自分たちの働く場を守りたい」という思いで行動した結果、155名ものサポーターから、合計763,290円の応援購入をいただくことができました。

まさに、逆境が団結を生み、困難を乗り越える力となった取り組みでした。また、この挑戦を通して、より多くの方々に私たちの活動を知っていただく貴重な機会にもなりました。

最後になりますが、ご購入いただいた皆さまに、心より感謝申し上げます。

（ソーシャルファームもぎたて　中原　力哉）

お詫びと訂正

前回1月号3面の『麦の郷の年男＆年女 今年の抱負』の記事の中で、お名前を間違って記載しておりました。『はぐるま共同作業所　和の杜　石田　凌正さん』と記載しておりましたが、正しくは、『はぐるま共同作業所　和の杜　石田　凌生さん』です。訂正して、お詫び申し上げます。

むぎのひと

はぐるま共同作業所
北山　郁子(左)
はぐるまのなかまとともに

麦の郷・はぐるま共同作業所に来させていただいた頃は20歳そこそこだったのに、気が付けばもう人生の半分以上を麦の郷で過ごさせていただいています。とっても良い仕事ととっても良いなかまに巡り会えた事に感謝しています。私の人生の中の「生きること」の大きな意味になっています。障害のある方も障害がたとえ重くても「自分が生きることの意味」あるいは「自分の価値を実感できる人生」を送りたいと思います。「自分が誰かの役に立ちたい・喜んでもらいたい」「自分の存在意義を認めてもらいたい」という想いを達成できるものは、成人であればやはり「仕事・労働」の中が大きく、その想いはたとえ障害が重くても、金銭的にはたとえ小さくても、あるいは金銭が発生しなくても想いは同じだと思います。何を仕事ととらえるか、本人の想いや得意をどうしたら自己実現に結びつけることができるかを想像する。労働現場でも相談の現場でも生活の現場でも療育の現場でも想像することは私たちの大切な仕事です。

イラスト：KAN-Z